

多様性と大学の今

名古屋大学エコトピア科学研究所
所長

興戸正純

Okido Masazumi
Director
EcoTopia Science Institute



「多様性」とは、異なる性質のものが同時に共存するフィールドである。自然界に生存する生命体からみた生物多様性はよく知られた言葉となっており、種の多様性の大切さが唱えられていると同時に、われわれ人類が起こした環境破壊を押し量る指標のひとつになっている。これは、生態系の多様性を一旦壊してしまうと、元に戻すことは至難であるといわれているからである。生物のもつ環境適応性は非常に興味深く、画一群よりも多様性を持った生物群の方が生き残りやすいといわれている。すなわち、自然の変化に対して種の中のどれかの個体が適応して生き残り子孫をつくることのできるからである。

一方、われわれの社会のなかでの多様性は、持続的発展を維持していく上で欠くことのできない要素である。これまでの歴史からみても、様々な思想・文化・民族が入り乱れて共存・共栄した地域では社会的な変革と科学的・文化的な発展が維持されている。例えば、多数の民族の移民によりできあがってきたアメリカでは、各々の民族が相互に尊重し切磋琢磨するなかから協調が生まれ、新たな時代の担い手が育っている。個人個人でお互いを理解し認めあう価値観、閉鎖的にならずにどこにでも出かける冒険心などが、社会の発展につながる。多民族国家ではなく社会システムも異なるわが国においてもこのような交わりの重要性を理解する環境を教育面で提供していくことが肝要である。それにより人生の中で遭遇する仕事や生活面での環境変化に対し、素早く応答して解決する能力を高めることができる。このような豊かで多様化した人間社会の実現のためには、単純な交わりを作ってそれを放置するだけではどうも理解と協調は生まれず、時代に即した新たな政策や教育改革が必要である。

さて、大学の構造改革では1987年に発足した大学審議会の答申等を踏まえて教育研究の高度化・多様化・個性化・組織運営の活性化の方針の下、種々の取り組みが着実に進められてきた。2004年度からは国立大学は法人化され、自律的・自主的な改善を行ってきた。2016年度から始まる第3期中期目標期間(6年間)では、持続的な競争力を持ち、高い付加価値を生み出す機能強化が迫られている。強いところをさらに伸ばし、その研究・教育に特化するという取り組みは重要ではあるが、たとえば理系だけ強化し文系を置き去りにするような改革であっては多様性や文化性の欠如に陥る危険性があり、持続的発展には決してつながらない。所内の教員の多くが併任している工学研究科では、10年以上前に複数の大学院の教員が集まって学部を持たない新たな大学院を設置し、新学術領域の形成を目指した研究を行い、これを教育にこれまで反映させてきた。また、20年前には工学系の異なる学科に所属する教授と准教授が一緒になって講座を作り、協働で7年程の任期付きのプロジェクトを行うセンター群が設置され、環境問題やエネルギー問題などに取り組んできた。これらのセンター群等を10年前にまとめて発展させたものが今の研究所となっている。このような歴史と改革は、第3期に向けてその成果や将来像が問われる時期に来ている。もちろん当研究所においても大学改革の流れの中、多様な研究領域をうまく活かして新たなフェーズに入ろうとしている。大学が多様性を維持しつつも、各大学の強みを活かした改革により持続可能な社会の実現に貢献できることを願っている。

最後に、大学以外の方々にはこれまでの大学改革と今後の進展がみえづらくなっていると思われるが、今の大学の現状を多少なりとも理解してもらうための一助となれば幸いである。